

インターネット版 第 2 号  
2002. September

## 目次 contents

巻頭言 附属図書館長 富盛 伸夫

特集 「附属図書館OPACの多言語機能について」 情報サービス係

寄稿 「日本のスペイン語辞書の歴史」 本学教授 寺崎 英樹

寄稿 「一群の史資料」 本学教授 藤井 毅

貴重書紹介 「本学所蔵明清時代等韻書」 本学教授 樋口 靖

図書館統計

図書館からのお知らせ

図書館講演会の開催のお知らせ

図書館展示会の開催の御知らせ

図書館日誌

編集後記

## 巻 頭 言

附属図書館長 富盛 伸夫

図書館の閲覧室の広い窓からみるキャンパスは中央広場のポプラや欅の梢が次第に色づき、建造物の基本色である落ち着いたレンガ色と静かな調和を生んでいます。移転してから2年がたち、次第に学生も教職員も新たな環境になじんできました。なかでも図書館の様々なコーナーが学生の皆さんの居場所として親しまれてはじめてきたことを、とても嬉しく感じています。

この一年間に図書館として企画し実現に向けて取り組んできたことが、この数ヶ月で大きな進展を見せております。まず第一にめざしたことは、図書館の敷居を低くし、できるだけ垣根を取り払うことであります。これは前図書館長時代からの引き継ぎ事項のひとつでもありましたので、大幅な利用規程の改定を3月にいたしました。学生諸君に対しては館外貸し出しの冊数と期間を思い切ってゆるやかにし、一方で、本学OBや一般市民の方々に対しても、図書閲覧の便宜を最大限にはかるようにしました。この一年で利用者の入館数の増加はいうまでもなく、貸出冊数も4割増しとなっていることから、特に学生諸君には良い反響を得られたと思っています。来館する参観者も本館ならではの情報機器の充実した設備やグループ閲覧室、論文執筆ブースなども熱心に見てくれますが、なによりも館内が利用する学生であふれ活気のあることに驚いてくれます。

図書資料のアクセスも、すでに移転とともにすべて開架式となっていますが、さらに、これまで教官研究室に備付けとして利用しにくかった専門書についてもできるだけ図書館内で閲覧できるようにし、研究室に長期保管されていたものも今後は「共同研究室別置」という特別措置をとおして、同僚・学生の方々にも閲覧しやすい流れを作ろうとしています。その分、先生方には不自由な場合もあるかと思いますが、この3年間で研究費の削減と平行して図書購入経費も約3分の1にも減少している現実をふまえ、少ない予算で持てるものをお互い

に利用し合える環境をつくる必要のあることをご理解いただければ幸いです。

さて、学内では大学法人化を1年半後に控え、そのための準備があわただしくなりつつあります。図書館では、昨年来実行してきた自己点検評価作業を今年度も全館員・委員あげてさらに徹底し、その上に目下、中期目標・中期計画を立てつつあります。このなかで見えてきたことは、大学図書館は教育研究に図書資料の提供・整備をはかる従来のサービスの使命に加えて、本学の学術情報資産をポータルサイト化して国内外に公開し、他機関ではなしえない独自の先端的研究領域を刺激し教育研究の活性化に寄与する方向に進むべきだということです。そのためには膨大な予算が必要であるとともに全学的な協調が必要ですが、図書館では学術情報の電子化とポータルサイト化のための予算要求をすすめています。すでに本年度は科学研究費（約2千万円）を獲得し貴重なヒンディー語文献のデータベース化の作業が着々と進行しています。幸いこのたび21世紀COEに2件、実に本学らしい個性に輝く分野（多言語対応の言語教育研究と史資料のデジタルハブ化）で認定されたことは、図書館の将来計画とまさに軌を一にした、本学のたいなる可能性を開くものであります。両COE拠点の充実に図書館としてもできうる限りの協力を惜しまないことはもちろん、この機会を好機と捉えて上に述べた図書館機能の拡充をすすめるつもりです。すでに情報処理センターとは連携して多様な情報サービスを行っていますが、これからはアジア・アフリカ言語文化研究所や視聴覚教育センターなどとともに、東京外国語大学全体の学術情報基盤の整備・充実に向けて整合的な計画を立てることを提案したいと思います。

秋深まりゆく日々に、図書館がわたしたちにとって何よりもほっとするひとときが過ごせる、自由な精神の憩いの場として親しまれる空間でありつづけることを祈っています。

## 附属図書館OPACの多言語機能について

附属図書館情報サービス係

### OPACが多言語版へリニューアル！！ (<http://www-lib.tufs.ac.jp/opac/index.html>)

皆さんが図書館の蔵書を調べる時、まず最初に使うものが「**OPAC（蔵書検索システム）**」でしょう。**OPAC**は、インターネットで**24時間**公開されているため、何時でも何処からでも資料を検索することができます。

この**OPAC**が、今年度から「**多言語対応版**」としてリニューアルされたのはご存知でしょうか？図書館は、本学の**26**専攻語を含む多種多様な言語資料を所蔵していますが、コンピュータで扱える文字の制限から、昨年度までは、日本語およびローマン・アルファベット表記の

言語以外の資料について、表示や検索が不自由なものや、全く登録されないものがありました。

新しい**OPAC**では、「**UTF-8**」という多言語を同時に扱うことのできる文字コードを採用し、文字の問題を解消しています。このため、中国語簡体字や朝鮮語（ハングル）、アラビア語など、世界の言語の多くを原綴りで扱うことが、技術的に可能となっています。

この特集では、この**OPAC**の多言語機能を、実際にどの言語をどのように検索することができるのか？という点からご紹介します。

### OPACで表示・検索できる言語

技術的に扱うことができて、実際に表示・検索するためには、目録情報が登録されている

必要があります。図書館では、現在、以下の言語について原綴りによる登録を行っています。

従来から登録している言語	新しく登録されている言語
<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 日本語（かな・カナ・漢字）</li> <li>➤ アルファベット表記の言語</li> <li>➤ ロシア語，モンゴル語キリル文字表記</li> <li>➤ ギリシャ語</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 中国語（繁体字・簡体字）</li> <li>➤ 韓国・朝鮮語（漢字・ハングル）</li> <li>➤ アラビア語（アラビア文字）の一部資料について、書名・著者名データ</li> </ul>

※これ以外の言語は、アメリカ議会図書館の翻字表（ALA-LC Romanization tables）に従ってローマン・アルファベットに変換して入力しています。原綴りでの検索はできませんので注意してください。



## 中国語資料について

### 書誌情報

[前の書誌](#) | [次の書誌](#)

資料種別:                      タイトル言語: 中国語                      テキスト言語: 中国語  
書名/著者名: 毛澤東研究全書 / 張靜如主編  
その他の標題: 異なりアクセス標題: 毛沢東研究全書  
ローマ字翻字標題: mao ze dong yan jiu quan shu  
出版事項: 長春: 長春出版社, 1997.10  
形態: 6冊; 22cm  
注記: 卷一: 总論編・生平編, 卷二: 著作編, 卷三: 思想編(上), 卷四: 思想編(下), 卷五: 生活編・師友編, 卷六: 家世編・海外編  
巻冊次: 卷一 总論編・生平編 - 卷六 家世編・海外編  
著者名標記形: [張, 靜如](#)  
書誌ID: BA38931271

中国語簡体字による表示・検索が可能です。

書名・著者名については、日本語音ヨミおよびピンインによる検索もできます。

平成14, 15年度中に、新分類図書の全点を登録完了する予定です。

## 韓国・朝鮮語資料について

### 書誌情報

[前の書誌](#) | [次の書誌](#)

資料種別:                      タイトル言語: 朝鮮語                      テキスト言語: 朝鮮語  
書名/著者名: 국어학논집 / 서울대국어국문학과 편  
出版事項: 서울: 圖書出版泰東, 1992  
形態: 冊; 23cm  
注記: 奥付の出版者: 태동문화사  
巻冊次: 제1집  
著者名標記形: [ソウル大學校國語國文學科](#)  
書誌ID: BA58137059

ハングルによる表示・検索が可能です。

書名・著者名が漢字表記の場合も、ハングルヨミによる検索が可能です。

平成14年度より入力を開始したため件数が少ないですが、現在、遡及入力を進めています。平成15年度中には、新分類図書の全点を登録完了する予定です。



## アラビア語資料について

書誌情報		前の書誌
資料種別:	タイトル言語: アラビア語	テキスト言語: アラビア語
原語タイトル: أفكار فلسطينية / جلال فاروق الشرف		
書名/著者名: Afkār Filasṭīniyah / Jalāl Fārūq al-Sharīf		
その他の標題: 表紙標題: Afkār Filasṭīniyah 1948		
出版事項: Dimashq : Manshūrāt Ittihād al-Kuttāb al-'Arab , 1981		
形態: 147 p. ; 20 cm		
著者名標記形: Sharīf, Jalāl Fārūq		
分類: LCC:DS119.7		
書誌ID: BA53204013		

アラビア語の基本データは、アメリカ議会図書館の翻字表に従ったローマン・アルファベット形式により登録されていますが、これに追加して、アラビア文字による書名・著者名データ[原語タイトル]の入力を開始しました。従って、[原語タイトル]が入力されているデータは、アラビア文字による検索が可能です。

## ロシア語，キリル文字表記のモンゴル語，ギリシャ語資料について

書誌情報		前の書誌
資料種別:	タイトル言語: ロシア語	テキスト言語: ロシア語
書名/著者名: "Наша университетская школа русских историков" и её судьба / В.С. Брачев		
その他の標題: ローマ字翻字標題: "Nasha universitetskai'a" shkola russkikh istorikov" i ee sud'ba		
出版事項: Санкт-Петербург : Изд-во "Стомма", 2000		
形態: 243 p. ; 20 cm		
注記: Includes bibliographic		
著者名標記形: Brachev, V. S. (Viktor)		
書誌ID: 1000394179		

書誌情報	
資料種別:	タイトル言語: タイム
書名/著者名: Apotelesmatika / post F. Boll et AE. Boer secundis curis editi Wolfgang Hübner	
その他の標題: 異なりアクセス標題: Claudii Ptolemaei Opera quae exstant omnia	
ローマ字翻字標題: Apotelesmatika	
出版事項: Stutgardiae: Teubner, 1998	
形態: lxxv, 438 p. ; 21 cm	
シリーズ名: Bibliotheca scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana. Claudii Ptolemaei Opera quae exstant omnia ; v. 3, 1	

館内のOPAC専用端末で、それぞれの文字による直接入力が可能になりました。

\* 疑問・質問がありましたら、図書館カウンターまでお問い合わせください \*

## 日本のスペイン語辞書の歴史

本学外国語学部教授 寺崎 英樹

最近辞書の世界も変化しつつある。特に若い人の中では携帯用の電子辞書を使用する人が増えているようだ。今の中・高生の中には電子辞書に慣れ親しむあまり、紙の辞書がうまくひけない生徒もいると言う。しかし、この種の辞書でひける言語は今のところ日本語と英語にほぼ限られている。本学で教えられている言語の中にはまだ辞書と言えるものがないようなものもある。言語によって辞典を取り巻く状況はかなり違っている。

一般に日本における外国語の辞書の発展史には次のような段階がありそうだ。

第一期、その言語の教育・学習が始まるが日本語の対訳辞書はまだ出版されていない。

第二期、辞書は刊行されているが、単語集程度のものである。

第三期、普通の文献ならこなせる対訳辞書が出ている。

第四期、実用に耐える複数の辞書があって選択できる。

第五期、多種類の辞書があって選択に困るほどである。

今の日本で英語はもちろん第五期に該当するが、アジアの諸言語などの場合、まだ第一期か第二期に当たる場合が多いだろう。近年ますます大学の教員に対して業績評価重視の傾向が強まっているが、言語によっては生半可な論文を書くより、信頼できる辞書を編纂する方が学問的にも社会的にもはるかに価値があるはずだ。

英独仏など日本で重視された西洋語の場合には、幕末・明治期から第二期が始まるのが普

通である。スペイン語の場合、対訳辞書の歴史はもっと古い。**1630**年にマニラ版『日西辞典』が刊行されているが、これは有名なキリシタン版『日葡辞書』（長崎、**1603-04**）を基にしている。また、同じく『羅葡日辞書』（天草、**1595**）を参考にして **Diego Collado** 『羅西日辞書』（ローマ、**1632**）が刊行されている。しかし、これらの辞書は主に外国人宣教師のために書かれたものだし、すでに **1613**（慶長 **18**）年、徳川幕府により全国的な禁教令が布かれ、**1624**（寛永元）年スペイン船の来航が、**1639**（寛永 **16**）年ポルトガル船の来航が禁止されて、いわゆる鎖国が完成するという時代の中では、日本人がそれらを目にする機会もなかった。したがって、日本のスペイン語辞書史は、事実上、明治時代に第一期から再出発することになる。

**1891**（明治 **24**）年高等商業学校（一橋大の前身）でスペイン語が第二外国語として開講されるが、これが日本で正式科目としてスペイン語が教育された初めである。そして **1897**（明治 **30**）年、高等商業学校附属外国語学校（本学の前身）が創設されるとともにスペイン語の専攻課程が発足するわけである**(1)**。このスペイン語教育の草創期には日本人向けの教科書もなく、当然辞書もなかった。入門書が出始めると平行して西和辞典が出るようになったのは大正期からで、やっと第二期に入ったことになる。

酒井市郎『新訳西和辞典』（海外社，1916）がたぶん最初の西和辞典であるが、これはまだ小型の単語集程度のものであった。酒井は東京外語を出て間もない卒業生で事実上の自費出版である。酒井は『和西辞典』（1918，筆者未見）も出版している。草創期の外語教官篠田賢易も西和辞典の編纂が急務と考えて、執筆に取り組んでいたが、1918（大正7）年その急死によって仕事は頓挫してしまった。大正末期には日墨協同会社編『西日辞典』（右文社，1925）が刊行された。メキシコの移住地で西和辞典の必要を痛感した同社が社員の村井二郎を辞書編纂に専従させ、会社が破綻した後出版にこぎ着けたもので（2），東京外語教官の金沢一郎も監修者の一人として名を連ねている。この辞書は中南米移住者たちの必需品であったとも言われるが、発行部数は少なく、あまり世に知られることなく終わってしまった。当時の外語生たちはこれら西和辞典よりも主に西英辞典に頼っていたようである。なお、金沢は『和西新辞典』（丸善，1919）を編纂しており、大正期に版を重ねている。

戦前期普及した事実上唯一の西和辞典と言えるのは村岡玄『西和辞典』（東京西班牙语学会，1927）である。村岡は卒業間もない明治末と大正期に数年、母校東京外語の講師を勤めた以外は市井にあってスペイン語の辞典編纂と学習書の著述のため生涯を送った人で、出版元は「学会」と銘打っているが、実際は自費出版である（3）。戦前の東京外語西語部生は入学すると、村岡の自宅にこの辞典を買いに行くのが習わしだったと言う。この辞典は語数は多いが、用例はほとんどなく、上級生は相変わらず **Appleton** 社の西英辞典やアカデミアの西西辞典に頼っていたようである（4）。和西としては長年日本に住んだスペイン人神父 **Juan Calvo** による『日西大辞典』（三省堂，1937）

が刊行されたが、外国人向けのローマ字見出しで使いづらいこともあって、学生にはあまり利用されなかったらしい。西和としては太田兼四郎『西班牙语辞典』（岡崎屋書店，1941）も出ているが、質・量とも村岡を凌駕するほどのものではなかった（5）。

スペイン語辞典の第三期は戦後の高橋正武『西和辞典』（白水社，1958）から始まると言ってよいだろう。一般にある外国語の辞典の水準というのは、その学界の学問的水準もさることながら、それを母語とする国の辞典の水準を反映するのが普通である。たとえば、日本で英語の良い辞書が多いのはやはり英米で優れた辞書が多数出ていることを反映している。スペイン語圏であらゆる辞書の原点となっているのはアカデミアの辞典であるが、高橋西和は特に **Vox** に負うところが大きかったようである（6）。

高橋西和は、今日から見れば、用例が少ない、意味記述が適切でない場合がある、新しい語彙・語義が入っていないなど、欠点をあげつらうことができるが、これ1冊で大抵の文献に対応できるという点で画期的であったことは間違いない。60年代から80年代にかけてこの辞典のお世話にならなかったスペイン語の学生はいないだろう。

この西和の独占状態が変化するのは90年代になってからである。桑名一博編『小学館西和中辞典』（1990），宮城昇・山田善郎編『現代スペイン語辞典』（白水社，1990），さらに **C. Rubio**，上田博人編『新スペイン語辞典』（研究社，1992）が相次いで出版されて、スペイン語辞書は第四期に入った。いずれも用例を多くし、それまでスペイン語の辞典にはなかった（不要と考えられていた）音声表記も載せるなど初心者配慮した学習辞典のタイプである。

どれも共同執筆で、村岡や高橋のように個人で生涯をかけて辞書作りをする時代は終わったようである。一方、和西辞典は、戦後出版された代表的なものとして死後出版の田井桂太郎『和西大辞典』（大学書林，1964）と宮城昇，E. Contreras 他『和西辞典』（白水社，1979）などがあるが、後者は最近改訂され、和西の市場をほぼ独占している。

スペイン語圏でも 90 年代以降ようやく外国人学習者を意識した辞典が出版されるようになった。また、創立の精神からして規範を示すことを目的とするアカデミアの辞典も豊富なデータベースに基づいて頻繁に改訂が行われ、新語や中南米の語彙、卑語の類も収録されるようになってきている。このような動きは今後日本のスペイン語辞書にも影響を与えずにはおかないだろう。それとともにこれからますます利用が増えそうなのは書籍の形を取らない前記の電子辞書や CD-ROM 版の辞書、そしてパソコ

ンで自由にアクセスできるオンライン辞書や言語コーパスである。

各種の用例を集めるにしても、昔のように文献を読んでカードを取るのと比べてインターネットは格段に便利である。しかし、便利ではあるが、一般的に言って値段の安い物は質も低いというのが市場の原理である。世の中には活字信仰があり、活字になっているものは口で言うよりも信用されやすい。同様に、インターネット信仰もあるようで、ディスプレイで見たものは無批判に信用する人がいるようだ。しかし、インターネットの世界は極端な玉石混淆である。良い情報もあるが、質の低いもの、信用できないものも非常に多い。内容ばかりではない。用例として利用する場合にも外国語で書いてあるものが何でも正しく良い文だとは限らない。そのことをよくわきまえて利用することが必要だろう。

#### 註

- (1) 詳しくは『東京外国語大学史』第 1 巻（東京外国語大学出版会，1999）スペイン語編参照。
- (2) 日墨協同会社は、1897 年に日本最初の中南米移民が入植し、まもなく失敗に終わったメキシコ榎本植民地の残留者が新たに結成した植民会社で、一時は繁栄するが、メキシコ革命時代の社会的混乱で行き詰まり、1920 年解散した。
- (3) この辞典は戦後は白水社から刊行され、1955 年に増補 5 版が出ている。村岡は他に『いろは音引和西会話辞典』（東京西語学会，1925），『西和熟語慣用句辞典』（同，1929），『地名辞典』（大観堂，1942）なども出版している。
- (4) アカデミア、つまりスペイン王立学士院（Real Academia Española）の最初の辞典は Diccionario de autoridades, 1726-39, 現在の最新版は Diccionario de la lengua española, 22a. ed., 2 tomos, Madrid, 2001.
- (5) カルボと太田の辞典は戦後昭和 30 年代に新版が出ている。
- (6) Gili Gaya, S., Vox diccionario general ilustrado de la lengua española, Barcelona, Spes, 1953.



## 【編集注】

文章中の書籍のうち当館所蔵資料の一覧を掲載順に以下、紹介いたします。  
興味のある方は、ぜひ、ご一読ください。

(本文)

著 者	タイトル	当館請求記号
<b>Ambrogio Calepino</b>	『羅葡日対訳辞書』（天草版）	<b>V / a3 / 16</b> （復刻版）
<b>Diego Collado</b>	『羅西日辞書』	<b>V / a3 / 15</b> （復刻版）
酒井市郎	『新訳西和辞典』	<b>S / I / 1595</b>
日墨協同会社	『西日辞典』	<b>S / I / 1465</b>
金沢一郎	『和西新辞典』	<b>S / I / 237</b>
村岡玄	『西和辞典』	<b>S / I / 686</b> <b>S / I / 1560</b> （複本）
<b>Juan Calvo</b>	『日西大辞典』	<b>P / a3 / 5</b>
太田兼四郎	『西班牙語辞典』	<b>S / I / 1579</b>
高橋正武	『西和辞典』	<b>P / a3 / 42</b> （増訂版 1979 刊行）
桑名一博	『小学館西和中辞典』	<b>P / a3 / 106</b>
宮城昇, 山田善郎	『現代スペイン語辞典』	<b>P / a3 / 108</b>
<b>C. Rubio</b> , 上田博人	『新スペイン語辞典』	<b>P / a3 / 501435</b>
田井桂太郎	『和西大辞典』	<b>P / a3 / 66</b> （第6版 1974 刊行）
宮城昇, <b>E. Contreras</b> 他	『和西辞典』	<b>P / a3 / 61</b> （デスク版）

(註)

著 者	タイトル	当館請求記号
村岡玄	『いろは音引和西会話辞典』	<b>S / I / 527</b>
<b>Real Academia Española</b>	『Diccionario de la lengua española, 22a. ed., 2 tomos, Madrid, 2001』	<b>P / a3 / 509603</b>
<b>Gili Gaya</b>	『Vox diccionario general ilustrado de la lengua española, Barcelona, Spes』	<b>P / a3 / 111</b> <b>(PRIMERA EDICION 1987 刊行)</b>

## 一群の史資料

本学外国語学部教授 藤井 毅

私が、インドの言語とインド史を学び始めたのは、**1970** 年代初頭のことである。その頃は、インド研究者でイギリスに留学したり、史資料閲読のために赴くというのは、珍しかったものである。海外渡航が自由化されてから然るべき時は経過していたものの、未だ外貨持ち出しには制限があったため、とにかく、まず、自分が研究対象とする地域に身を置こうとする欲求のほうが、やはり勝っていたのだろう。私自身も、また、周囲の人々も、ひたすらインドを目指したものだ。もちろん、時代背景ゆえのことだろうが、植民地支配旧宗主国には行くまいという妙な心情的反発があったのも、否めない事実であった。結局、私が初めてイギリスに渡るのは、**1990** 年を待たねばならなかった。

現在では、イギリス国立図書館の統合移転にあわせて、セント・パンクラスに場所が移ってしまっているが、インド関係史資料の最大の所蔵機関であるインド省図書館及び文書館 **India Office Library & Records(IOLR)** は、当時、ロンドンのウォータールー駅近くに位置していた。建物は、およそ図書館らしくない極めて素っ気ないものだったが、館長に案内されて書庫と史料保管庫にひとたび足を踏み入れるや、そうした外貌のことなどは、どうでもよくなってしまった。書架の終端が霞んで見える書庫のなかで、呆然と立ち尽くすというのが、まさにその時の姿であったと思う。

所蔵される図書と史資料の量には、ただただ圧倒されるだけだったが、やはり研究者と

しては、タイトルだけか、せいぜい断片的な引用でしか目にするこのできなかった文献が、請求しさえすれば、殆ど無制限かつ自由に閲読できたのは、まさに驚きともいえるべき体験だった。

イギリス国立図書館が所蔵する南アジア諸語文献は数十万冊に達し、公文書にいたっては、総量を把握することすら能わないものだった。それらを一冊一冊、一種類ずつ書庫より取り出してもらい見てゆくに連れ、その史資料学上の、さらに書誌学上の価値に気付かされることは圧倒的であった。しかし、同時にそれは、閲読しなければならない分量が如何に膨大であるかを示すものに他ならず、しばし茫然自失の状態が続いたものだった。

史資料の全容を把握すべく試行錯誤を繰り返し、最終的にその解決方法として辿り着いたのは、図書であれ公文書であれ、関連する史資料の所蔵カタログを最初から最後まで包括的に読み通すというものだった。

それは、一見すると何とも効率が悪く迂遠な作業に見えるかもしれないが、結局のところ、大量の未知の史資料に対するにおいて、それ以外には途はなかったのである。そうした作業には、結局、通算して一年か一年半近くの時間がかかっただろうか。それにあわせて、巨大な山を崩すべく、ただひたすらこつこつと史資料を読み続け、それは今日まで絶えることなく続いているわけである。

カタログを一頁ずつ繰ってゆく作業を続け、複数のインド近代諸語文献の総覧を終えた段階で、出版物に見られる興味深い傾向に

気付かされることになった。かつて研究では取り上げられることの無かった分野の文献が、大量に存在していることが、自ずと浮かび上がってきたのである。そうして「発見」された文献群の一つが、カースト集団の来歴を記した「カースト族譜」と呼称することになる刊行物だった。それは、かつて、アメリカ議会図書館に在籍した司書が幾ばくかを目録化し、それに依拠して、シカゴ大学の南アジア担当専門司書であったパターンソン **Maureene L.P.Patterson** が、マラーティー語図書に限って僅かながらに論じていたに過ぎず、その総体は全く把握されていないものだった。所蔵調査が進んでゆくと、「族譜」の存在は、マラーティー語を越えて、ヒンディー語やウルドゥー語は言うまでもなく、ベンガル語や南インドのドラヴィダ諸語にも広く見られる存在であり、なおかつ、刊行時期も、19 世紀中葉に始まり、世紀の変わり目を夾み 1930 年代には頂点に達し、現在もなお発行され続けていることが明らかになっていったのである。

この文献は、東アジア地域に見られる族譜と同じように、発行時より過去を振り返り、自らが属する血統の正統性と卓越性を語るために親族組織の歴史を再解釈したものである。場合によっては、神話的血統に自らを結び付け、神話的歴史を捏造することによって自らの来歴が語られていた。興味深いのは、ヒンドゥー教の復古的な改革運動を推進したアーリヤ・サマージなどの団体が、数多存在するカースト（ジャーティ）を純粋な 4 ヴァルナ (**Brahman, Ksatriya, Vaisya, Sudra**) に統合するために族譜の刊行を推進し、専門の執筆者を擁していた事実だった。そのことが判明した段階で、「カースト族譜」は、近現代社会史研究にとって貴重な資料となり

うることが確認されたのである。

文献の検索と書誌データの採録作業には、8～9 年の年月を要しただろうか。ようやく完成した『カースト族譜文献所在目録』(編集注)には、3 千数百点余を採録することができた。南アジア諸言語の出版物は、当たり前のことながら、文学書や宗教文献のみであるわけがなく、歴史研究にとって史料となりうる多くの図書を内包しているのである。



(『カースト族譜文献所在目録』)

史資料の総体を把握しない限り、書かれたもので詳らかになることとならないことは解明されず、全体への視座を欠いて個別は語りえないはずである。それは、南アジア研究の全てに及ぶ真理であるとは言えないものの、少なくとも歴史研究に関してはその通りであると思われる。南アジア史には、まだまだ、研究が進んでいない分野が数多く残されており、研究者の総数も中国史やイスラーム研究と比して、決して多いとはいえない。ちょっとした才能とセンスさえあれば、若くして研究の最先端に躍り出ることも可能である。願わくば、それが、史資料の断片的かつ恣意的な摘み食いによってもたらされたものではないことである。

ロンドンには、イギリス国立図書館の他にも、国立公文書館(**PRO**)、ロンドン大学東洋アフリカ研究学部(**SOAS**)やロンドン大学経済学部(**LSE**)、ウェルカム研究所、帝国戦争博物館文書室などの複数の史資料所蔵機関が存在している。また、現在では、アメリカ議会図書館が非常に大規模な図書収集事業を続けており、戦後に刊行された図書については、イギリスを凌駕しているものと思われる。さらに、アメリカ国立公文書館(カレッジパーク)が保有する文書群を欠いては、もはや南アジア現代史は語り得ないことが明

らかとなっている。これらの場所にインドを加えれば、史資料閱讀と収集のための周回ルートが成立することになる。

それを幾度となく辿ってきたが、研究者よりは、所蔵機関の方が遙かに先行しており、史資料の保存と共有のためのこうした諸機関を繋ぐネットワークが立ち上げられつつある。日本の機関が、わけてもアジアアフリカ諸語文献を多数架蔵する本学附属図書館が、その一端を担いうる日が近からんことを願うばかりである。

#### 【編集注】

文章中の『カースト族譜文献所在目録』について

**1996 年版**：『カースト族譜・系譜・家族史文献所在目録(1996 年版)；カースト及びインド社会論関係研究図書目録(1955～1995 年) / 藤井毅編』に収蔵(当館請求記号 **I / 361 / 469341**)

**2000 年版**：『海外所蔵南アジア近代諸語資料に関する基礎調査：南アジアとヨーロッパを中心として / 研究代表者 麻田豊, 分冊 2』に収蔵(当館請求記号 **I / 025 / 499419 / 2**)



## 本学所蔵明清時代等韻書

本学外国語学部教授 樋口 靖

明清時代もまた「音韻鋒出」の時代であった。およそこの三、四百年の間に出来した等韻書・音韻書の数はいくつとでもいうべきものがある。本学図書館にも数は少ないが何点か収蔵されている。さして珍奇というほどのものは見当たらないが、目を通すことのできた数点をここに紹介し、同好の諸氏の研究あるいは学生諸君の勉強の参考に供することとしたい。

「正音撮要」4巻、高静亭、嘉慶庚午（1810）初刻。本学のものは道光甲午（1834）学華齋蔵板。本書は広東人が正音すなわち官話を学ぶために作られた語学参考書である。土音（広東音）に拠って官話音を学ぶ方式を採っているのが大きな特徴である。たとえば、「土話異音官話同音」の項は広東語では読みを異にするが官話では同音という字群を収録してある。これによれば官話では「齒」と「使」が、「一」と「日」がそれぞれ同音ということになっている。また、「正音千字文集類」（千字文の個々の字に正音による反切を付してある）では「所註切音必須以正音切之。若以土音切則不肖官話音韻矣」とはっきり断っているが、「金」字は「知因切」であり、「真」字は「知根切」となっている。

「人」は「如陳切」で、「有」は「如九切」である。さらに、「所註切字、上一字分四声之上下、如字字係四声、則宜字亦下四声也。辰字係上四声、則即字亦上四声也」とあって、切上字は粵音において陰陽を分かち声調体系が考慮されていることが推測されるし、「下一字分平上去入、如字字係上声、則举字亦上声也。辰字係入声則得字亦入声也」とあって、入声にも配慮されていることが分かる。これらはすべて「土音」

に依拠しなければ理解できないものである。

「李氏音鑑」6巻、李汝珍、嘉慶10年（1805）序、嘉慶15年（1810）初刻。本学のものは光緒戊子（1888）埽葉山房重鐫本。小説「鏡花縁」の作者として知られる李汝珍の著。第6巻「字母五声図」は33字母（声母）に33韻と5声調を配当したもの。北音を基礎にして南音をも示せるように工夫したところに特徴がある。北音から見れば声母は19種に過ぎないのであるが、南音のために「粗、細」を区別することによって南音を指示できるよう、14字母増えているわけである。北音は39韻母と思われるがこれを22韻とし、南音における-nと-ng韻尾の合併もこれに包摂されるようになっている。李氏の北音の声調は4調体系であったと思われるが、南音に配慮して5調体系としている。「音鑑」は「韻学叢書」（清丁頤編）にも収められており、最もよく知られた等韻書の一種で、研究論文も夥しいので詳しくはそれらに譲る。因みに筑波大学図書館所蔵のものは同治戊辰（1868）、木樨山房蔵板で、本学収蔵本より20年古いが版面はほとんど変わらない。

「山門新語」2巻、周贇、同治癸亥（1863）刊。本学の所蔵は光緒癸巳新鐫本。「琴律三十韻母分經緯生声按序切音図」が等韻図に当たり、それに対応する「琴律四声分部合韻同声譜」が韻譜になっている。作者の神秘主義的言語観には閉口するが、御託を取り除けば、要するに19声母、14韻30韻母、6声調の体系となろう。「山門新語」では見系1等と2等を区別しない韻母（たとえば「改＝解」）と区別する韻母（たとえば「高≠交」）が混在している。ま

た、「奇」(支韻)は姫韻(-i)に属し、「期」(之韻)は璣韻(-ɿ)に属して発音を異にしている。声調は陰平、陽平、上、陰去、陽去、入の 6 声である。著者周贊は寧国の人である。寧国は現在の調査では江淮官話地域であるがもともとは徽語地域であつたに違いない。安徽方言のある種の特徴が反映されている可能性は高い。なお、績溪(趙元任)、歙県(歙県話音档)を始めとして徽語には 6 調体系を持つ方言が多い。

「正音咀華」3 卷、莎彝尊、咸豐癸丑(1853)刊。本学のものも同じく咸豐癸丑刊。双門底聚文堂蔵板とある。「正音撮要」と同様、広東人のための官話学習テキストである。声母は微母を保存して 20 種類。韻母は 35 種。声調は 5 声。「凡例」に「彙注如崑字本姑渾切、音輝、読作坤音。巨字上声、音矩、読作具音。淡字覃上声、音毯、読作澹音。如此之類係借音從俗読者而為言語相通也」とあるので、「同音彙注」を見ると、「崑」は「古温切」、「具」は「基遇切」、「淡」は「搭岸切」とあつて、確かに「俗に従」っていることが分かる。「音」はおそらく土音(粵音)を「借」りたのであろう。「濁上歸去」はまだ「俗」とする観念があつたわけである。また、「土音同正音異」、会話集、語彙集には「土音」(粵音)による音注が朱字で施されている。「同音彙注」にも墨で「土音」による音注が書き込まれている。これによって、官話「日」が粵語の「二」のように読まれていたことが分かるのである。土音による注音は筑波大学所蔵同治乙丑(1865)右文堂発兌本にも見られるが、小型本で印刷も悪く、かつその注音は黒字によるもので数としても本学所蔵のものほど多くない。「正音咀華」もよく知られた資料であり研究論文も多いが、なぜか粵音との関係を論じたものが少ないのは憾みが遺る。

「剔弊五方元音大全」(剔弊広増分韻五方元音)2 卷、趙培梓、嘉慶15年(1810)序。本学所蔵のものは京都文成堂蔵版「増補剔弊五方元音」なるもので、発行年の記載は見当たらない。北方方言形成史の一級資料である樊騰鳳「五方元音」は順治から康熙初年という清初に成立したとされている。その後清朝の著明な政治家年希堯による増補版が「五方元音大全」或いは「五方元音全書」という書名で何度か刊行された。さらにその後、嘉慶15年に至って「剔弊」の名で趙培梓が改編したのが本書である。「大有補於元音、使元音可垂於不朽」(趙培梓の自序)と主張しているが、両者の増補改定「五方元音」は実は樊騰鳳の原著の内容と大幅な食い違いがある。特に、趙氏は三十六字母と詩韻韻目の呼称を復活させ、濁上、清去・濁去を分立させ、入声も上入・下入を区別するなど、要するに復古的姿勢が目立ち、原本「五方元音」の最良価値を損なうとして悪評噴々である。しかし、これもまた、たとえば、実際の発音が「上平、下平、上、濁上、清去、濁去、上入、下入」の 8 声調であつたわけでは決してなく、伝統的音韻觀念の上でこのような区別を示そうとしたに過ぎないのであろう。韻略易通で呼模韻(-u)と居魚韻(-iu)の字(中原音韻では魚模韻に纏められている)は、趙氏はこれを「虎韻合口上等」(-u)と「虎韻合口下等」(-iu)に分けた。このうち「合口下等」所属の字は樊氏の原本「五方元音」では「地韻」に編入されて(この点は年氏本も同じ)単母音(-y)に変わっていたはずのものである。従って、「去」はk 'iu、「取」はts 'iuのようになり、これに配当されている入声「玉」はiu(?)、「六」もliu(?)のようになるはずである。これまた趙氏の守旧的觀念に沿った処理と見なすこともできようが、ある種の実際の官話音を反映する可能性も残されており研究の価値はあると思う。

「音韻正訛」4巻2冊、孫廷燦輯・呉道生訂、存古堂蔵板、刊行年未詳。本書は趙憩之「等韻源流」序に明（宣城）陳廷燦「音韻正訛」として書名だけが紹介されているものである（陳廷燦とあるのは孫廷燦の誤り）。趙氏によれば明代のものということになる。本学のものは残念ながら下巻が欠けている。平上去入それぞれ1巻で全4巻のはずであるから、「去・入」の2巻が見当たらないのである。それゆえ隔靴搔痒の感は免れないものの、音系のおおよそを見るに、まず、声母は、「委（影母）≠尾（微母）、五（疑母）≠武（微母）」であるので、微母の残存が確認できる。また、「寅（以母）＝銀（疑母）」であるので、疑母は消滅していたらしいことが見て取れる。よって、「韻略易通・早梅詩」と同様に微母を含む20声母の体系となる。しかし個別には「宜（疑母）＝尼（泥母）」のように疑母が泥母に混入している例もあって注目される。韻の分類は平声で見ると「天、韓、元、藍、班、林、陰、紬、憂、胡、夫、王、剛、洪、公、何、梭、痴、卑、齊、梅、姚、蕭、懷、皆、沙、麻、蛇、遮」の29類に分けられており、いささか風変わりといえる。同様にして、

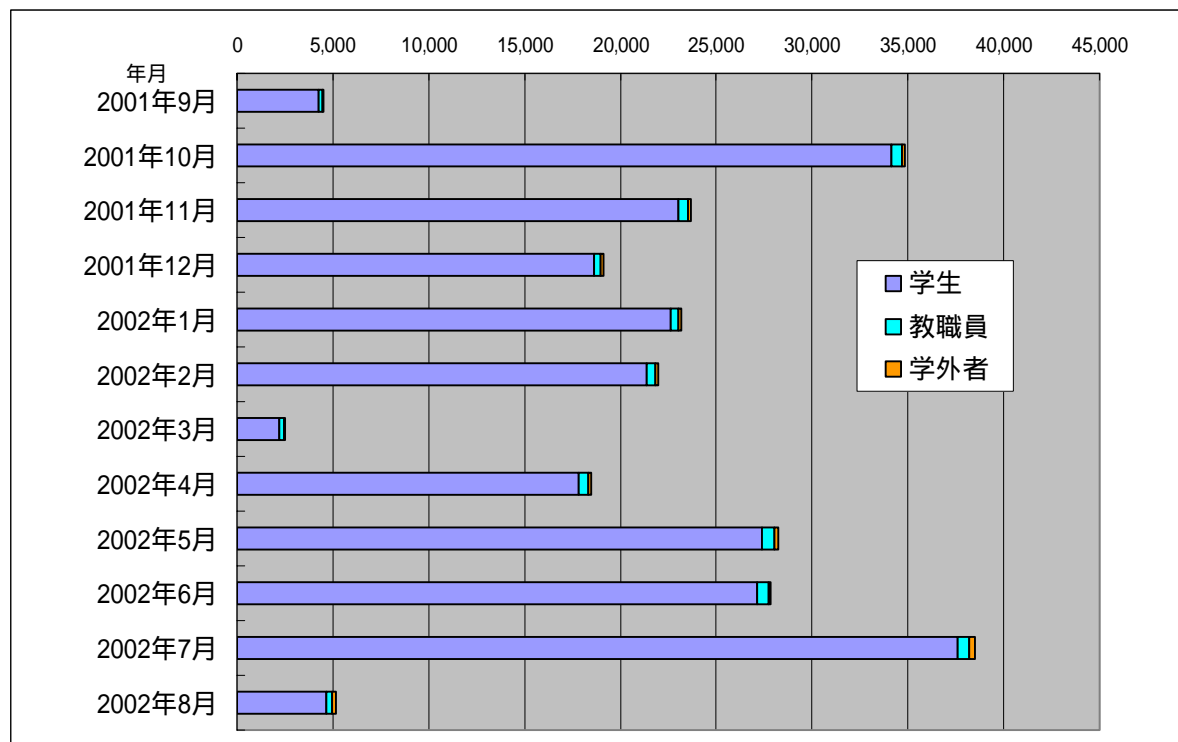
上声は15類、去声は14類、入声は7類である。深咸摂は臻山摂に合流している（「千」と「簽」は同音）。臻深摂と曾梗は合併している（「林」と「隣」と「零」は同音）。また中原音韻の「桓歛」韻（中古桓韻）のように「音韻正訛」もまた「寒山」から独立させようとする傾向がある。（たとえば、「関≠官、班≠般、晩≠完」など。）声調は「平上去入」の四声であるが、韻目からも見て取れるように、平声で陰陽を区別していることは明らかであるから、おそらくは少なくとも「陰平、陽平、上、去、入」の5声調である可能性が高い。本書は韻図ではなく一種の同音字表（反切も付されていない）であるので四声相配の状況がはっきりと掴めず、音価推定には困難が多いと思われる。特に入声はそうであろう。本書は総じて徽語の大きな影響下にあることは間違いない。もし宣城あるいはその周辺の方言と比較できればなんらかの進展が期待できるかも知れない。なお「中国古籍善本書目」（上海古籍出版社）に「音韻正訛4巻、明孫耀撰、明崇禎17年刻本」とあり、あるいは、これは本学のものと同じものであるかもしれない。

【編集注】文章中の書籍のうち当館所蔵資料の一覧を掲載順に以下、紹介いたします。興味のある方は、ぜひ、ご一読ください。

タイトル	当館請求記号
「正音撮要」	C / II / 2750
「李氏音鑑」	諸岡文庫 / II / 8
「山門新語」	諸岡文庫 / II / 163
「正音咀華」	諸岡文庫 / II / 161
「剔弊五方元音大全」	諸岡文庫 / II / 160
「音韻正訛」	諸岡文庫 / II / 77

# 図書館統計

## 月別入館者統計



月別入館者数

	2001 年 9 月	2001 年 10 月	2001 年 11 月	2001 年 12 月	2002 年 1 月	2002 年 2 月
学生	4,254	34,160	23,010	18,607	22,641	21,371
教職員	178	518	528	371	381	452
学外者	58	181	159	127	129	128
合計	4,490	34,859	23,697	19,105	23,151	21,951

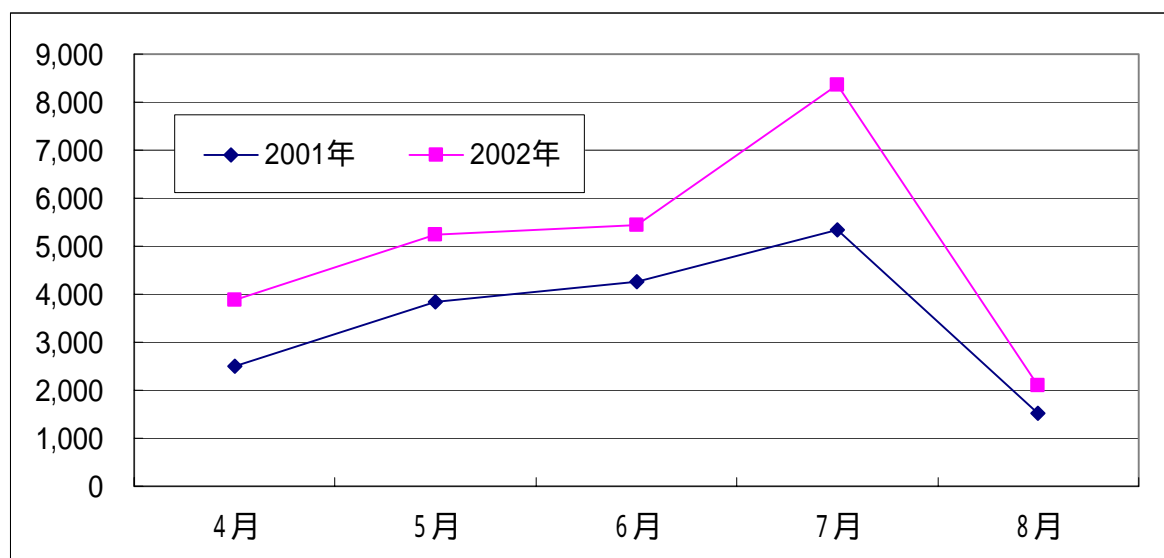
	2002 年 3 月	2002 年 4 月	2002 年 5 月	2002 年 6 月	2002 年 7 月	2002 年 8 月
学生	2,218	17,833	27,393	27,140	37,571	4,631
教職員	221	493	620	577	628	349
学外者	43	120	208	135	270	160
合計	2,482	18,446	28,221	27,852	38,469	5,140



# 図書館統計

## 貸出冊数統計

貸出冊数同月比較（利用規程改正前／改正後）



### 参 考

平成14年4月より利用規程が改正され、貸出条件が以下のとおり変更されました。

身 分	利用規程改正前	利用規程改正後
学部学生	3冊2週間	10冊2週間
大学院生	10冊1ヶ月	20冊1ヶ月
教官	40冊6ヶ月	30冊3ヶ月
職員	10冊1ヶ月	20冊1ヶ月

### 貸出冊数統計

2001年	学部学生	大学院生	教職員	計	2002年	学部学生	大学院生	教職員	計
4月	1,382	861	255	2,498	4月	2,182	1,273	424	3,879
5月	2,332	1,173	327	3,832	5月	3,304	1,513	422	5,239
6月	2,580	1,293	389	4,262	6月	3,540	1,466	442	5,448
7月	3,600	1,402	348	5,350	7月	6,105	1,891	367	8,363
8月	893	408	218	1,519	8月	1,121	733	255	2,109

# 図書館からのお知らせ

## 図書館講演会のお知らせ

- 附属図書館では、平成12年から公開の講演会を図書館の活動の一環として行っております。今年、本学出身の作家島田雅彦氏による講演会を下記の要領で実施する予定です。多くの方のご参加をお待ちしています。

テーマ 「群島論—民族移動 太古から現代まで—」

講 師 島田雅彦氏

日 時 平成14年10月30日（水）

17時—18時30分

場 所 東京外国語大学マルチメディアホール  
(研究講義棟1階)

お問い合わせ・申し込み

東京外国語大学附属図書館総務係

電話 042-330-5193

FAX 042-330-5199



## 貴重書展示会のお知らせ

- 附属図書館では、平成12年から講演会と時期を併せて当館が所蔵している貴重書の展示会を実施しております。今年は「一群の史資料」の寄稿を頂きました藤井教官監修によるインド研究史資料の展示会を開催する予定です。講演会同様、多くの方のご参加をお待ちしております。

展示資料 西欧におけるインド研究史資料（16世紀～19世紀出版の貴重書）

期 間 平成10月28日（月）—11月1日（金）

場 所 東京外国語大学附属図書館1階ギャラリー

## 平成14年度前期図書館活動日誌

- 4月 1日 **MAGIZINEPLUS** 契約（～平成15年3月31日）
- 4月 9日 入学式（館報「カスタリア」配布）
- 4月18日 国立大学図書館協議会東京地区協議会総会3名参加  
（於東京学芸大学）
- 4月10日 平成14年度図書館オリエンテーション（全6回 ～5月1日）
- 5月 1日 **Kluwer** オンラインジャーナルトライアル開始（～7月一杯）
- 5月15日 平成14年度第1回図書館委員会
- 5月21日 国立大学附属図書館事務部課長会議1名参加（於一橋記念会堂）
- 5月30日 「附属図書館報（**Castalia**）第3号」PDF版を公開
- 6月 4日 平成14年度情報リテラシー科目第4回附属図書館担当分「情報検索講義・演習」  
（6月4日、6日、11日の3日間）
- 6月19日 平成14年度第1回選書委員会
- 6月26日 第49回国立大学図書館協議会総会（於鳥取 ～27日）
- 7月 1日 国立大学図書館協議会オンラインジャーナルトライアル開始  
（**EBSCOHost**、**PROQUEST**）（～10月31日）
- 7月 2日 多摩地区3大学附属図書館館長懇談会2名参加
- 7月17日 平成14年度第2回図書館委員会
- 7月22日 東京地区国立大学附属図書館事務長懇談会（於東京大学）
- 7月31日 平成14年度第2回選書委員会
- 8月26日 電子ジャーナル・ユーザ教育担当者研修会1名参加（於東京工業大学）  
法人格取得問題に関する附属図書館懇談会（於東京大学）
- 9月19日 多摩地区3大学附属図書館事務担当者打ち合わせ1名参加
- 9月20日 科学研究費（研究成果公開普及費）「近代インド・パーキスターン関係文献デジタルアーカイブ」入札

---

## 編集後記

館報カスタリア第4号を、インターネット版としてお届けします。今回はコンピュータと関連して、附属図書館内で進行中のプロジェクトについてご紹介したいと思います。

利用者の皆さんが図書検索時に用いる図書館 **OPAC** や国立情報学研究所の **Webcat** 等の目録は、図書情報を記述するための一定のルール（目録規則）に則っています。しかしながら、東洋諸語は、記述の基本は同じですが、これまではコンピュータ上で扱える文字コードに制約があったため、各言語固有の文字を、アルファベットに転写（＝翻字）して記述するのが常でした。現在は東洋諸語についても徐々に文字コードが制定され、中国語の簡体字や朝鮮語のハングルなどは入力が可能になりました。国立情報学研究所は、次の目録の多言語対応にアラビア文字系言語を選び、目録規則策定の小委員会を発足させました。この委員会に本学教官と図書館員が参加して大きな役割を果たしつつあります。他の東洋諸語の目録の原綴化にも同様に、本学図書館が関わっていくでしょう。またこれと同時並行で、インド稀覯古書の電子画像化や、中国語・朝鮮語遡及入力のプロジェクト等も進行中です。図書館は今、大きく変わっていかようとしています。

図書館へのご意見・ご要望をどんどんお寄せください。

---

### Castalia:東京外国語大学附属図書館報 第4号 :インターネット版

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/gaiyo/kanpo/castalia-4.pdf>

2002年9月30日発行

発行 : 東京外国語大学附属図書館 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

TEL / FAX : 042-330-5193 (TEL) 042-330-5199 (FAX)

ホームページ : <http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>

編集発行人 本橋文治郎

編集長 内島秀樹

編集委員 山田穰

千葉亜紀子

小林こずえ